

第 66 号

● 目次 ●

巻頭言 「歴史のポリティクス」	1
最近の講演会・研究会等	
東北アジア学術交流懇話会 公開講演会	2
プロジェクト研究ユニット 講演会	2
センター共同研究 研究会	3
上廣歴史資料学研究部門監修古文書展示	3
客員教授紹介	4
センター創設 20 周年記念シンポジウム案内	4
新任教員・スタッフ紹介	5
プロジェクト研究ユニット モンゴル語・満洲語資料検索システム	6
海外出張のトラブルーその傾向と対策ー「胸ポケットとトラブルの相関関係」	7
活動風景「イスラムのクリスマスツリー (?) とサンタクロース (?)」	8
編集後記	8

巻頭言

歴史のポリティクス

東北アジア研究センター長

岡 洋樹

歴史、つまり過去というのは、いろいろな語り方ができるしろものである。東アジアの歴史とか、地中海世界の歴史といった広い地域を枠組みとすることもできるし、郷土史といわれるもののように、もっと小さな地域である場合もある。これは歴史を語る者の視野、視点の問題である。しかし国を単位にして歴史を語るとなると、問題はがぜんややこしくなる。普通国の歴史というと、今現在の国の領土内の過去のできごとを指しているからである。たとえば日本の歴史というのは、現在の日本国の領土が基準となる。もし今、1944 年の日本の支配地域を日本史と呼ぶと、ただちに政治問題化するだろう。歴史上、国の領土は伸縮を繰り返した。古来ユーラシア史上に興亡した国々の歴史は、その伸縮の度合いにおいて、日本の比ではない。13 世紀にチンギス・ハーンが建国したモンゴル帝国を、現在のモンゴル国と比較してみれば一目瞭然であろう。モンゴル国の歴史叙述は、モンゴル帝国を自国の淵源とし、誇りにさえている。しかしそれは、現在のモンゴル国の淵源としてであって、帝国領がただちにモンゴル国の領土であるべきだなどという考えに基づいたものではない。近代では、「民族自決」などといわれるように、国を作るのは民族とされる。だから国の歴史とは民族の歴史でもあるのだが、世界の国の

ほとんどは「多民族国家」なのだから、民族が公認される限り、国の中の民族の数だけ異なる歴史の語りが存在することになる。日本ではあまり意識されないことかもしれないが、これは抜き差しならない問題を含んでいる。多くの民族が暮らす大国では、国の歴史の語りとともに、「(少数) 民族史」が設定されていることが多い。これによって、民族の歴史意識がうまく共存する仕組みが作られているわけである。国の歴史と民族の歴史はいつも同一であるとは限らないものの、相互に「公認」することで共存が保たれているのである。東北アジアを特色づけるのは、中国やロシアといった大国の統治である。これらの大国は多民族国家で、「民族問題」を抱えながらも、破局的な解体を避けることができている理由のひとつとして、このような歴史の語りの在り方を挙げることができるように思われる。その意味では妥協の産物と言えるかもしれないが、この妥協が、好むと好まざるに関わらず、歴史の語りの多様性を可能にする余地を生み出していることも事実なのである。



最近の講演会・研究会等

① 東北アジア学術交流懇話会 公開講演会
エリートたちの北京
 ～清代の日常風景～



東北アジア学術交流懇話会の平成 27 年度公開講演会が 5 月 22 日（金）に東北大学東京分室で開催された。講演会では「エリートたちの北京～清代の日常風景～」というテーマで、落合守和（おちあい もりかず）首都大学東京客員教授による「満洲族の暮らしとことば」および、栗林均（くりばやし ひとし）東北大学教授による「清代北京城に暮らした旗人（エリート）たちの日常」と題する 2 つの講演が行われた。

中国清朝の時代（1636～1911 年）に現在の北京市の中心部、地下鉄環状線（2 号線）の真上には、幅、高さともに 10 メートルを超える堅固な城壁が巡らされ、東西南北九つの城門以外に内外に通じる道はなかった。城壁に囲まれていたこの「北京城」の内部に住むことができたのは「旗人（きじん）」と呼ばれる支配階層の人たちに限られていた。

18 世紀の乾隆帝の時代に、その北京城で満洲旗人が自らの言葉を学ぶために『一百条』と呼ばれる会話学習書が出版された。対話形式の百篇の話題を集めたこの学習書には北京城に暮らした旗人たちの日常生活や人間関係に関わる生き生きとした情景が描かれている。

最初の講演者、落合教授は清代における口語中国語と口語

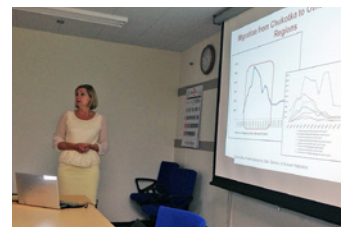
満洲語の変遷を研究しながら『一百条』に注目してきた。落合教授は満洲語の会話学習書である『一百条』から、口語中国語や口語モンゴル語の対訳が付された『清文指要』、『初学指南』、『三合語録』等が編纂され、さらに『談論篇百章』（1867 年）といった中国語の会話学習書へと発展していく過程をたどり、文献学的な研究を紹介した。

栗林教授はモンゴル語学が専門であるが、『一百条』のモンゴル語訳である『初学指南』（1794）の日本語訳を出版したことから『一百条』に関わってきた。『一百条』では、旗人は何もせずとも国から食いぶちをもらって暮らせる身だが、だからこそ儉約と学問に努めるべきだと説いている。同時に、飲酒、暴食、賭博、色事を戒めながら、それらで没落した話がいくつも語られていることから、そこには当時の旗人の生活を実際に見聞した当事者の経験が具体的に描写されており、清代の北京城における旗人（エリート）たちの日常生活を知る上で極めて興味深い文献であると指摘した。

（ハイ・セチングアー）

※本講演会の詳細な報告が東北アジア学術懇話会ニューズレター『うしとら』の第 66 号に掲載されています。

② プロジェクト研究ユニット
「21 世紀東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット」
 講演会



2015 年 7 月 29 日、東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟の会議室において東北アジア研究センタープロジェクト研究ユニットの「21 世紀東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット」講演会が開催された。本講演会では、ロシア科学アカデミー地理学研究所社会経済地理学部門上級研究員（同志社大学経済学部客員教授）のタマラ・リトヴィネンコ氏（Dr. Tamara Litvinenko）をお招きし、「ロシア極北地域における人口動態と居住様態の変容、その民族及び天然資源活用との関係（“Population Dynamics and Transformation of Human Settlement in Northeast Arctic Regions of Russia and Their Relation to Ethnicity and Natural Resource Use”）」という演題でのご講演をいただいた。発表および議論は英語で行われ、公開での開催である。

発表では、チュクチ自治管区を含むロシア極北地域における人口移動のパターンを中心に、人口移動にともなう天然資源

利用との関係性について、現地の写真なども交えながら様々な角度から報告された。特に、同地域の人口移動が天然資源利用の安定性を導くのか否か、という点に焦点が当てられ、民族構成や家族サイズの変化、トナカイ飼養頭数や鉱業の推移、タウンシップの発達や社会制度などの多様なデータから天然資源利用の安定／非安定にかかわる要因について指摘がなされた。

参加者を交えた議論では、人口移動パターンと集団の年齢構成との関係性や人口移動を促進する要因などについて質問がされ、発表者と活発な議論が行われた。また、「本研究から地方政府や連邦政府に対してどのような提言が可能か」、「持続的に天然資源の利用を続けるためにどうすべきか」など、研究の内容を超えた将来的な展望についても議論が及び、他地域で研究を行う研究者にとっても大変興味深い内容の講演会となった。
 （藤岡悠一郎）

3 共同研究

「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」

第1回研究会

共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」の2015年度第1回研究会は、客員教授として本センターに滞在していたゲール・フォンダール氏、高倉浩樹氏を報告者として6月19日（金）にセンター4階会議室で行われた。

高倉氏は「津波被災地の農業復興と農民の在来知—宮城県山元町の事例」と題して、宮城県山元町の津波被災地の土地利用と、稲作農家の事例について報告した。土地利用については、震災後の土地利用制限とそれ以前に決定していた国土利用計画の齟齬について詳述した。ともに大規模経営が目指される内容であり、その実例としてT氏があげられた。T氏は震災後に耕作をやめた水田を借り受け、省労働力を目指し、また刈り取り時期をずらすために機械植え、ラジコンヘリによる散播、機械式直播など多様な作付けを行っている。広大な水田を管理していくための成熟過程系と生物応答系の在来知のあり方、遊びとしての在来知などについて指摘した。

フォンダール氏は「Producing Space through Law,



Producing Law in Place」と題して、氏が専門とする法地理学の基本コンセプトについて報告した。具体的には、法律とは何か、空間と法律の相互関係性、法律が作り出す土地のリスクや安全性について説明した。また法律を決める場に誰がいるべきか、異なる立場の集団がどのように関わるべきかなどについて指摘がなされた。

震災後の土地利用に関しては、建築制限や高台移転など行政による法的規制と被災者の対立構造があると考えていたが、フォンダール氏による法地理学の考えを学ぶと法律が空間をつくとともに、空間も法律をつくるというよりフラットな見方が可能になると感じた。当日は、文学研究科や災害科学国際研究所、さらに県外からの参加者も交えて活発な議論が交わされた。（山口 睦）

4 上廣歴史資料学研究部門監修古文書展示

東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門監修の古文書展示が、宮城県柴田郡川崎町の青根温泉旅館不忘閣で6月より始まっている。

不忘閣は江戸時代以来続く老舗の温泉旅館である。離れの御殿をはじめとする建物は国の登録有形文化財に指定されている。江戸時代を中心に、古文書も多数所蔵されており、上廣部門では開設当初よりNPO法人宮城歴史資料保全ネットワークと協力して調査を進めてきた。昨年7月には、その成果報告も兼ねて、公開講演会「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」を開催している。講演会では多くの来場者に恵まれたが、地域の歴史をありありと表す古文書の魅力をさらに広く伝えたいと考え、上廣部門監修による、御殿内での古文書展示を企画した。

展示は今春から準備を進め、6月24日に完成している。ガラスケース3つ分（各3段）のスペースに古文書15点を並べ、解説用のアクリルプレートを設置した。年代は主に江戸時代で、仙台藩主の来訪や飢饉時の住民の対応がわかる史料、旅館のおもてなしの精神を綴った家訓など、青根温泉の江戸時代の歩みがわかる展示になっている。

展示に際しては、不忘閣の皆様はもちろん、川崎町の方々にもご協力いただいた。青根温泉は蔵王から7キロほどの位置にあり、火山活動による風評被害の影響も受けている。そうした地域に少しでも明るい話題を提供できれば、という思いもあっての企画であった。河北新報7月6日の朝刊では、「古文書で浸る青根温泉500年 不忘閣で展示」という見出しで展示の記事が掲載された。

歴史研究や古文書調査の成果を活かした地域での活動を、今後も続けていきたいと考えている。（高橋陽一）



客員教授紹介



●客員教授
陳 志寧
(チェン ツイーニン)

私は今回 2015 年 3 月から 5 月の間、客員教授としてセンターに滞在いたしました。これまで日本には研究員としての長期滞を含め何度も訪れた事があり、多くの日本の研究者と交流がありますが、東北大学にどうしても滞在したかったのは佐藤源之先生とは旧知の仲だったというだけではなく、彼が地中レーダシステム研究において抜群の業績があるためです。

滞在中は講演会、各種会議、ラボツアー、キャンパス訪問を通じて、GPR や合成開口レーダーの事だけでなく東北大学における科学、技術、教育、文化について沢山のことを学び、佐藤研メンバーをはじめ、東北大学や他大学の教授とも新たな友情と仕事上の関係を深めることができ、あらゆる側面に非常に感銘を受けました。

また、この滞在により私の本務である国立シンガポール大学とインフォコム研究所で行っているアンテナ技術の研究、開発、実用化について、私の経験を皆さんと共有できた事を大変喜ばしく思っております。私が滞在中行った 6 件の講演では、アンテナ、超広帯域アンテナ、RFID 用アンテナ、ミリ波アンテナの小型化やメタマテリアルベースのアンテナの研究について紹介しました。

2ヶ月間というのは佐藤教授や他の方々の研究について深く知るには非常に短い時間でしたが、この経験は近い将来、国立シンガポール研究所アンテナ技術センシングセンターと東北大学において共同研究の推進及び大学教育関係を構築するための最高の一歩だと私は強く信じております。



●客員教授
Yildirim Dilek

イルディリム・ディレック氏（米国マイアミ大学 Distinguished Professor）は、5 月から 8 月にかけて客員教授として約 3 ヶ月間、本センターで研究を行った。同氏は世界の大陸衝突帯や海洋プレートの変動の研究を精力的に進めている。世界の研究者との共同研究も多く、国際地質科学連合（IUGS）の副会長や、国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の科学委員をはじめ、国際的な研究機関の要職を数多く務めている。

同氏は世界の大陸衝突帯に注目した研究を行ってきた研究者である。大陸は何億～何千万年の時間かけてプレートの動きに沿って移動するが、ある大陸と大陸両者が衝突する際には、その間に存在していた過去の深海底の岩石（オフィオライト）が衝上し分布しているのが一般的である。同氏は、このような地質を情報源に地球史におけるプレートの動きとそ

の変化、深海底の地質や岩石の特性などにおいて、顕著な業績をあげている研究者である。最近では、中近東からチベット高原にかけて分布するオフィオライトを精力的に調査しているが、東北アジア研究センターに滞在した 3 ヶ月間は、特に日本列島に着目した共同研究を行った。日本列島は西南日本の太平洋側や北海道の東部にプレートの沈み込みの痕跡である付加体という地質が残されていて、その中の沈み込んだプレート物質である玄武岩に注目し研究を行った。7 月に行った北海道東部の地質調査では、さすがに世界の長年の地質調査を経験している同氏とあって、岩石露頭に前に現地での議論が大いに盛り上がった。また、同氏の気さくな人柄により、研究室の学生や他の研究室の研究者との交流も多かったようである。理学部における同氏の講演も大変好評であった。（平野直人）

東北大学東北アジア研究センター創設 20 周年記念企画国際シンポジウム
東北アジア：地域研究の新たなパラダイム

日時 2015 年 12 月 5 日（土）、6 日（日）
会場 仙台国際センター（〒980-0856 仙台市青葉区青葉山無番地）

◎12/5（土）セッション（9：00～）、記念式典（13：30～）、
記念講演会（14：00～）、総合セッション（16：30～）

<記念講演>

講演 1：山室信一氏（京大人文科学研究所）「思想課題としての東北アジア」
講演 2：篠田謙一氏（国立科学博物館）「DNA から見た日本人の形成と北東アジア」

◎12/6（日）セッション（9：00～）

参加費無料、要参加登録

<登録フォーム>

<http://goo.gl/forms/d789IYWjmr>

※詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



東北大学東北アジア研究センター



●教授
辻森 樹

はじめまして、こんにちは。2015年9月1日付けで東北アジア研究センター基礎研究部門（地球化学研究分野）教授に着任した辻森樹です。1972年、石川県山中温泉生まれ、専門は地質学、特に変成岩岩石学です。1999年に金沢大学博士号を取得した後、スタンフォード大学研究員などを経て、鳥取県三朝温泉にある岡山大学地球物質科学研究センターに約8年半、教員として在職しました。これまで造山帯の野外地質学とその構成岩の岩石学を主軸とした総合研究を行い、とりわけ過去のプレート沈み込み帯の岩石から、地球内部のダイナミックな振る舞いを解明し、地球の変動の歴史の解読に挑戦してきました。西南日本をはじめ、極東ロシア、中央～東南アジア、北米西岸、中米、東アフリカなどでフィールドワークを行い、青色片岩など沈み込み帯で形成された低温高压型変成岩や宝石として一般に知られる翡翠（ひすい輝石岩）の研究を行ってきました。ともすれば天然の多様性の記載の繰り返しに陥りがちな地質学諸分野の体系化にも、強い関心を持つようになりました。

地質学が誕生するはるか以前に人類は「石」を道具として使う事を覚え、それを加工することを発明しました。やがて美しく輝ける「石」を特別なものと考え、装身具として身につける価値を見出しました。先駆者にとって、それらは護符の意味、あるいは地位・権力、及び特定の集団の象徴であったかもしれません。東アフリカの大地溝帯から現生人類が拡散し、その移動と進化の過程で多様な民族への分化が起こり、異なった集団毎に固有の「石」の文化が開花します。我々の祖先の誰が最初に「石」に魅了されたのか？そして、どのような好奇心を掻き立てられたのか？「石」の物質科学的研究に携わっていると、ふと先史時代に構築された「石」の価値観が、現代まで受け継がれていることに驚かされます。

今後はこれまでの経験を活かし、東北アジア研究センターにおいて築かれてきた地域研究拠点としての基盤と関連分野の学際的研究をさらに発展させるべく皆様との連携を積極的に模索し、実践的かつ柔軟な研究と教育に尽力する所存です。どうぞよろしくをお願いします。



●教育研究支援者
山口 睦

私は、近代日本社会における贈与交換の変容、地域社会と国家の関係について歴史人類学的研究を行っています。博士課程（東北大学）では、宮城県や山形県におけるフィールドワーク、山形県のある農家に保存されていた200年分の祝儀帳や香典帳といった贈答記録の分析、兵士への慰問袋などのトピックから近代日本社会における贈与行為と社会の変容について分析を行いました。博士論文は、東北大学出版会の若手出版助成を受けて『贈答の近代—贈与交換と日本社会の人類学的研究』（2012年）として出版しました。

昨年からはその研究を発展させた研究課題「災害支援と贈与について的人类学的研究」（科研若手B）を進めています。東日本大震災における災害支援として、緊急時の必要物資、募金以外に花やチョコレートなど心を慰める「贈り物」が贈られる事例がありました。これらの支援について、贈る側であるNPO団体や支援を受けた被災者、協力企業などにインタビュー調査をしています。また、慰問袋は銃後の国民から前線の兵士に贈られる

だけでなく、国内の災害支援にも用いられていました。慰問袋が被災者へ贈られていた代表的な機会として、1914年の東北凶作、1923年の関東大震災、1934年の関西風水害（室戸台風）がありました。慰問袋は兵士に対しても、災害被災者に対しても、贈る人の名前や住所を書くということが奨励されました。受け取り手が礼状を書き、そこから個人的な交流へと発展することが期待されていたからです。

私は、「災害と地域文化遺産に関わる応用人文科学研究」ユニットの教育研究支援者ですが、2013年から宮城県丸森町筆甫地区における放射能対策について調査を行ってきました。筆甫地区は宮城県では放射線量が高い地区として有名ですが、福島県とは異なり町や県による放射能対策は遅れていると言わざるを得ない状況です。今後は筆甫地区の人々の放射能への取り組みを、県境を挟んだ福島県新地町、相馬市、伊達市と比較しつつ検討していく予定です。

新任紹介



●教育研究支援者

李 善姬
(イ ソンヒ)

私は韓国出身のママさん研究者であります。専門は、文化人類学であり、「ジェンダーとコミュニティ」を大きな研究テーマとしています。韓国で大学を卒業した後に来日し、東北大学大学院国際文化研究科に入学、日本の東北地域と韓国の農村地域をフィールドに日韓の巫俗文化と女性間関係を比較研究しました。2005年、『日韓の巫俗と女性——巫俗儀礼に現れた女性間関係と地域社会の分析から——』で博士学位を取得しております。

現在は、「東アジアにおける移住の女性化と日韓の地域社会の変容」をテーマに研究を進めております。それは、これまでフィールドとしてきた農村地域にもグローバル化が進んでいることを研究に反映するためです。地域には、いわゆる仲介による国際結婚カップルが増え、地域社会内の多様化が実質的に進んでいます。このような時代の変化を追うため、移住

女性を取り巻く社会状況の中で、ジェンダー規範がどのように表出され、それがどのようなプロセスの中で展開されていくのか。コミュニティ内の多様化はどのように問われ、それぞれのコンテキストの中で「共生」がどのように進んでいくのかを考察しています。研究は、地域におけるフィールドワークで行われており、中でも移住女性たちのライフストーリー分析を主な研究方法としています。

2011年の東日本大震災後は、災害と移住女性に関する研究も進めております。いまだ十分な社会資源を得ていない移住女性たちの災害経験を通して、「減災」のために必要な社会政策や共生の方向性を提言しています。移住女性たちの経験を生かすことは、日本社会における格差や脆弱性を明らかにすることにつながるからであります。

プロジェクト研究ユニット「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」

モンゴル語・満洲語資料検索システム

本年1月から、モンゴル語と満洲語の文献資料および辞書をインターネットで利用できる「言語資料検索システム」が東北アジア研究センターのホームページで開設・運用されている。これは「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」(研究代表栗林均教授)の活動成果として開設されたもので、次のURLで誰でも自由に利用することができる：<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/>

現在モンゴル語と満洲語の文献資料、辞書約40点が登録されており、それぞれの資料・文献の説明と検索システムの使い方は、ホームページ左上の「Guide」をクリックして読むことができる。

本検索システムに登録されている資料と辞書の言語は、モンゴル語、満洲語のほか、モンゴル系のオイラート文語、ダグル語、土族語、東郷語等が含まれている。多種の言語に加えて検索方法が多様なことは、検索システムの大きな特徴となっている。文献ごとに、伝統的モンゴル文字、キリル式モンゴル文字、満洲文字、トド文字、中国漢字(簡体字、繁体字)、ローマ字、日本語(かな)といった様々な文字による検索が可能となっているほか、前方一致、完全一致、部分一致、全文検索などの検索方法も組み込まれている。

右:『蒙文総彙』の検索結果と原文の画像



左:電子化され、検索システムで利用できるようになった資料と辞書(一部)

登録されている資料と辞書の中には、栗林教授がこれまで東北アジア研究センターから叢書や報告として出版した『元朝秘史』『華夷訳語』『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』『蒙文総彙』『蒙文倒綱』『蒙漢字典』等が含まれており、これらの書籍がすべて電子化され、多様な検索方式で縦横に利用することが可能となっている。さらに、検索結果に示された「出現位置」から、原本の画像を表示して確認することができ、「電子化利用」の利点を最大に生かしたシステムとなっている。

(ハイ・セチンゴアー)

海外出張のトラブル —その傾向と対策—



特任助教
前田 しほ

胸ポケットとトラブルの 相関関係

海外出張のトラブルは、地域研究者なら誰しも経験するところである。快適な観光地やビジネス街が目的地ではないので、トラブル遭遇率は、一般の旅行者・出張者よりも多いのではないだろうか。ちょっとした気の緩みや連絡の行き違いで発生した失敗から、個人の努力では避けようがないトラブルまで、多種多様である。体感として、恐怖を感じるのは、初めての土地で、現地の事情に無知なあまり、これくらい大丈夫だろうと、日本の感覚や生活をもちこんでしまったときである。しまったと思った時は遅い。カルカッタの市街地で、タクシーが捕まえられないまま、どんどん暗くなり、どんどんラッシュはひどくなる。どのバスも混雑ぶりは尋常ではないし、そもそもバスの路線もわからない。現地の若者にはからまれるし、郊外のホテルまでどうやって戻ろうかと途方にくれたことがあった。このときは通りすがりの人が声をかけてくれて、親切にもタクシーを拾うのを助けてくれたので、無事に帰ることができた。しかし、現地の状況を知る男性がタクシーを捕まえるのに、30分もかかったのである。あのまま夜中まで取り残されていたらと思うとぞっとする。人様の親切に頼って切り抜ける、というのは本当の解決策ではない。むしろ、善良な人なのかという見極めや、人の好意を引き出すというのも一種の能力である。学生時代の後輩に、困ったら、とりあえず泣く、と言う人がいて、正直ドン引きしたのであるが、これも一種の処世術ではある。ロシアのおばちゃんには、小柄な日本人の若い女性は子供のように見えるので、それがしくしく泣いているとなったら、放っておけない。それこそすっとなできて甲斐甲斐しく世話を見てくれるだろう。実際、私も、ちょっと困った顔をしながら、健気に頑張っている様子を見せると、苦境を切り抜けることがあるので、少々意識的に演出することがある。「女」を武器にするのは、はなはだ本意なのであるが、ロシアではソ連以来の権威主義的な官僚主義と闘わなくてはならないので、好意の獲得は生き延びるための必須要件なのである。

ただ、これとは別に思うのは、不注意が原因のトラブルもかなり多いということだ。逆に言えば、周囲を観察したり、自分の振る舞いを見直すことで、回避で

きたり、損害を軽減できそうな事件もある。この際、海外慣れしているかどうかはあまり関係ないようだ。集団での海外調査を何度かアテンドして気づいたのは、明らかに不注意が原因のトラブルが多い人がある。例えば、胸ポケットにパスポートを携帯するタイプは危ない。驚くことに、けっこういるのだ。しかも、進言しても、決して聞き入れることはない。その一人がある日、パスポートがないと真っ青になっている。何時間も探し回って、ようやく、床の上から発見された。どうやら、チェックイン後に、部屋に荷物を運び入れ、かがんで床に置こうとしたときに、胸ポケットから荷物の影に滑り落ちたようである。なお、胸ポケット氏に共通の傾向として鞆を持ち歩かない、財布をずぼんの尻ポケットにねじこむ特徴がある。つまり普段の日常生活の習慣を旅先にもちこんでいるのだ。当然尻ポケットからすられた経験もお持ちである。強者になると、財布ではなく、現金を裸でねじこんで、これで大丈夫とのたまう。もっとも、件の人物はだいぶ懲りたようで、この事件以来鞆を持ち歩くようになった。

とはいえ、この事件はまだ可愛い方である。別の胸ポケット氏は、生命の危機にさらされた。なんと、国際会議のため宿泊していたホテルで火災が発生したのである。ゆうゆうとお休みしていた胸ポケット氏は、火事を知って、まず最低限の身支度を整えるところから始めなくてはならなかった。その後、別々の場所に散乱、ないし保管していたパスポート、財布、会議の読み原稿が保存されたUSBメモリを探し出さなくてはならなかった。すべてを手にして避難しようとしたとき、廊下はすでに真っ黒な煙に覆われており、一寸先も見えなかった。逃げ遅れたのである。からくも消防士に救出されたものの、避難先では、むしろ、ゆっくり休むことはできない。翌日の会議では、すすで汚れ着の身着のまま、精神的打撃から立ち直れないまま、火傷でがらがらの喉から絞り出して、ようやく発表を終えた。今後、すぐに逃げられるように貴重品を入れる鞆を買おうと思いますと宣言していたが、こちらの御仁が鞆を手に入れている姿は未だ見ていない。

もっとも、自分もうっかりモスクワで未登録のブラックホテルに泊まる羽目になり、真夜中に何者かの気配で目を覚ましたら、枕元のドブネズミと目があつたことがある。これには慌ててホテルを替えたので、当時の給料一か月相当の支出となり、懐は大打撃を受けた。他者の失敗を笑えないのであった…。

活動
風景

イスラムのクリスマスツリー(?)とサンタクロース(?)

東北アジア研究センター准教授 柳田 賢二

筆者は旧ソ連の中央アジア多言語社会におけるロシア語の観察のために2005年以降毎年ウズベキスタンを訪れ、また2005-09年には隣国のキルギスとカザフスタンにも足を伸ばした。今回はその副産物として目にする事となった同地のイスラム教について記す。まずはこれまでに強く記憶に残った地元イスラム教徒の言葉を列挙する。「イスラム教とは一言で言えば『平和の宗教』だ。テロを行うような者はイスラム教徒ではない。コーランには『人を殺してはならない』とはっきり書いてあるのだ。」(ドゥンガン人元英語教師。2005年、キルギスの首都ビシュケク近郊の村で。)「ラマダンの断食は健康によい。しかし断食を禁じられている人々もいる。病人、妊娠および授乳中の女性、幼児、旅行者だ。またもし断食をしていて具合が悪くなったら一家全員が直ちに断食を止めなければならないことになっている。私は昨日まで断食を守ってきたが今はもう旅行者だから朝食を食べる。」(ウズベク人通訳。2008年。タシケントービシュケク間の機中で。)「僕も断食を守りたいところなんだが、毎年断食を始めて数日すると頭が痛くなって仕方なしに食べなきゃならなくなるんだ。だから今日は昼飯を食べる。」(ウズベク人技師。2009年。ウズベキスタンの首都タシケントで。)「仏教とはどんな宗教なのか?—(筆者)日本の仏教は全く厳しくない宗教だ。たくさんの宗派があって宗派間の教義の違いは非常に大きいとその間の争いはほとんどない。日本人の多くは自分を仏教徒だと思いつつながら仏教に関心がない。しかしキリスト教は異質なものと考えている。それでいてクリスマスは宗教的意味抜きで祝う。一そうすると日本の仏教とはこのイスラム教と同様に日常生活上の習慣の総体のようなものなのか?」(キルギス人大学講師。2008年。キルギスの首都ビシュケクで。)

中央アジアにも「厳格イスラム」を自認する人々はいらる。そうした人々は普段から酒を飲まず、結婚式さえも男女別席かつ一切禁酒で静かに行う。そして「厳格イスラム」ではなくても豚肉を食べることはしてはならない。しかし、実を言えばごく普通の人々にとってのイスラム教とは上述の言葉に見られるような「ゆるい」ものなのである。一日に何度もモスクに通う宗教熱心な人々もいるが大多数の人々は日本人と同様に仕事優先であり、仕事を中断してお祈りしている姿



イスラム教徒の家の「新年ヨールカ」(2013年12月)

を見ることはまずない。

ソ連時代のロシアではクリスマスを脱宗教化し、12月から1月上旬にかけてクリスマスツリーを「新年ヨールカ」と称して立てた。また子供たちにプレゼントをくれるサンタクロースを「マロース爺さん」と呼び、これも新年行事として残した(注:そもそもロシア正教のクリスマスは1月7日である。

また「ヨールカ」はエゾマツ、「マロース」は酷暑を意味する)。

私自身2013年暮れに初めて目の当たりにしたことだが、ロシア人の多くが出国し国民のほとんどがイスラム教徒となった現在のウズベキスタンにおいて、驚いたことにこの「新年ヨールカ」と「マロース爺さん」が復活し、商業の現代化に伴いつつその勢いを取り戻しつつあるのである(写真上)。2007-09年も年末に同地を訪れたがこうしたものを目にするのではなく、私はこれについてキリスト教人口の減少と脱ロシア化によるものだろうと考えていた。しかしそうではなくソ連崩壊後長く続いた経済不振ゆえであったようである。現在に至るも同国の庶民は相変わらぬ生活苦を訴え続けている。ところが、貧富の差の拡大を伴いつつであっても2005年以降の10年間でタシケントの町並みは見違えるほど美しくなって物資も豊富となり、日本と全く変わらぬ大型スーパーが次々に建てられている。そして、行政による新年の装飾や大型スーパーの客寄せとして「新年ヨールカ」と「マロース爺さん」が街のあちこちに現れたというわけなのである。ウズベキスタンのイスラム教徒たちはこれらがキリスト教の行事に由来することを知っているが、ゆえに排除する必要があるとは考えなかったということになる。このことは、一方ではこれらがソ連時代に脱宗教化された上で同地に定着したことによって、また他方では同地のイスラム教の「ゆるさ」によって説明することが可能であろう(写真左)。

中央アジアの国々はいずれもイスラム原理主義を排し、ソ連時代以来極めて科学主義的な教育を受けてきた人々をその国民としている。それゆえ、こうした「ゆるさ」がイスラム圏一般に存在すると考えることは誤りであろう。しかしイスラム一般について「戒律が厳しい」、「他宗教の共存を認めず恐ろしい」といった観念を持つことはさらに大きな誤りである。宗教規範が厳しい社会もゆるい社会もあるのはいずれの宗教についても言えることなのである。



マロース爺さんに花やプレゼントを届けさせる会社の広告HP(タシケント)

編
集
後
記

海外調査にトラブルはつきものである。ある研究会の懇親会の二次会で「外国でひどい目に遭った話でも回しましょうか?」と水を向けたところ、想像もできないような体験が次々と披露されて大いに盛り上がったことがあった。起こりうるトラブルを予測して切り抜けることができるのは経験の力によるところが大きい。ご同輩の経験に学ぶべく、「海外出張のトラブル—その傾向と対策—」のコーナーを設けてみた。(栗林 均)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第66号 2015年10月30日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

